

7. 合科的学習（美術科・英語科）を取り入れた総合学習 （国際理解教育の視点から）

— 「あの子の笑顔が見たいから～海を越えて君の心を届けよう」を通して —

持田隆志・中金智子

1. 講座の基盤

(1) 講座設定の理由

「国際化の時代」と言われ、国際理解教育の重要性が叫ばれて久しい。しかし、とすれば、「国際人は英語が話せる必要がある」、「外国のことをよく知っているのが国際人である」などといった、受動的で知識理解中心のとらえかたをされがちであったように思う。しかし、本来の意味での国際人とは、「さまざまな価値観、文化が存在する国際社会の中で、自己と自国の文化に対する確立した認識をもち、同時に他者の文化も尊重して、それぞれが確立してきた自己を、認め合い、高め合おうとしていく人間」ではないだろうか。

さて、世界に目を向けてみると、経済的な豊かさは国、地域によって様々である。本校の生徒達にとっては当たり前前の生活が、当たり前ではない国が世界には数多く存在している。この現状を知ることが、生徒達にとって、自分自身や自国の生活を再認識するとともに、現代国際社会の課題を認識することにつながると考えた。そのうえで、困難を抱える国の現状を知り、その国の未来を創る子供達に、「国際社会の中でともに生きるわたしたち」という視点から、自分にできる何かをしようとするのは、テーマ群の目標の副題に掲げた「国際人としての能力や資質に気づき、自らの生き方を問う生徒の育成」につながると考え、この講座を設定した。

(2) 学習活動の工夫

① 美術科と英語科の連携

生徒のこれまでの学習を総合的に生かすとともに、教科の学習が実際の場で活用できる経験をすることによって、自らの「学び」を問い直すきっかけになればと考えた。

② 表現活動を取り入れた学習

学習の中でわかったこと、感じたこと、願ったことなどをもとに作品の制作に取り組み、それを対象の国、地域に贈る活動を通して、表現力・コミュニケーション能力が育成され、グローバル的視野からの創造につながるのではないかと考えた。

③ 社会人講師の活用

実際に外国へ行って現状を視察して来た人の話を聞くことを通して、実感を伴った理解をするとともに、生涯学習の一端に触れ、自らの「生き方」と「学び」を見つめるきっかけになればと考えた。

2. 目標

(1) 最終達成概念

人類は、それぞれの生活環境の中で様々な問題を抱えながら生きている。国際社会に生きる一員として、日本人という狭い見地から離れ、地球規模で自分の考えや生き方を見つめる必要がある。

他国の生活の現状や問題点を知り、困っている人達のため、自分にもできることがあることに気づき行動することは、視野を広げ、互いにより良く生きようとする姿勢を身につけるステップになる。

① 友達の見方のちがいや自己の見方の変化に気づく。

他国の生活環境や問題点を知ることは、今まで当たり前だと思っていた自国の生活を再認識するとともに、様々な価値観の存在に気づくことになる。一つの目的のために友達と意見を出し合うことにより、自分の考え方や価値観を見直すこともできる。

② 社会や異世代の人々（対象）の見方の違いや共通性に気づく。

経済的に恵まれず、教材や教具が入手困難な子供達に、手作り教材を送ろうという今回の取り組みは、子供達が「将来、自国の未来を切り拓いていくための基礎となる力」を身につけるための手助けである。本当に役立つ援助をするためには、その国の文化や生活を認め、よく調べ上げたうえで、その国に生活している人達の立場になって物事を考える姿勢が必要となる。

それは、人間としてよりよく生きるためには何が必要かという根本的な共通の価値観を探ることにつながる。

③ 自分、友達、対象者の見方や考え方をまとめ、

自分の生き方を見つけることの大切さに気づく。

「自分たちがつくる教材によって、子供達のどんな力を育てるか。」ということが個々に与えられた命題である。手先の訓練から、見る力・読む力・感じる力、創意工夫する態度や根気、あるいはものを大切に作る心など様々であるが、最終的には夢や希望・思いやりや心のつながり

といったところにつながっていく。

そのようなことを目的とし、考え工夫しながら気持ちを込めて制作することにより、制作者自身の心の変革が期待できる。

このような経験が、国際的視野だけでなく互いに協力しながらよりよく生きていこうとする姿勢と行動力を育てていく。

3. 合科的学習を取り入れた学習計画

時数	活動内容	教科からの支援
1.5	社会人講師の講話 ～フィリピンにおける幼児教育の現状～	
1.5	社会人講師との話し合い	県・市立図書館、おもちゃの図書館の資料を紹介する（教科としては、主に美術科。英語科は教科以外の立場で関わる。）
2	制作物の検討（絵本・おもちゃを参考に） →グループ決め	美術科、英語科ともに資料収集や創作に対する見通しがもてるように援助する。
	活動計画の立案	
2	制作物の決定→イメージスケッチ	美術科……制作の手順、作品としての出来映え等に、留意したものになるよう助言する。 英語科……英語としての妥当性、教材としての妥当性に目を向けるよう助言する。
	CH (美術科)	
	CH (英語科)	
夏休み	製作の調査・資料集め・準備	美術科……作品としての美しさ、完成度が高まるよう支援する。心をこめて制作することの喜びを感じとれるよう助言する。
	製作	英語科……英文チェック、お話づくりへの支援、幼児用教具としての妥当な英語をめざすための支援をする。
3	仕上げ作業（製本・塗装など）	
2	試行（作品を実際に読みあったり、遊んでみる）	

4. 表現活動を生かした学習の実際

(1) 美術科の視点から

美術科としては、創造的な表現活動を生かしながら国際理解及び福祉的な学習を展開しようと考えた。想いを込めてものをつくる楽しさ・手作りの持つ意味・造形が持つ教育的な力など、普段の創作活動では学習できない内容もあり、有意義であった。

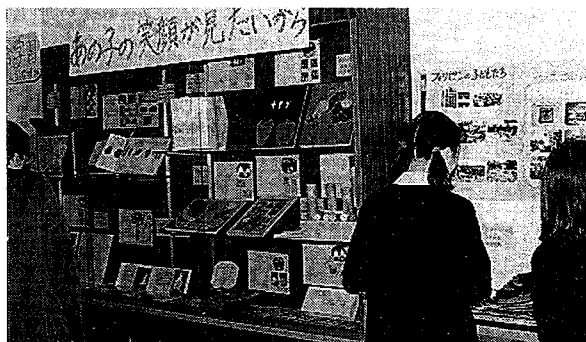
「自分のつくる教材によって、子供達のどんな力を育てるか。」これが個々に与えられた命題であった。手先の訓練から、見る・読む・感じる力、創意工夫する態度や根気、あるいはものを大切に作る心など様々である。生徒はそれぞれの作品に、夢や希望、思いやりや願いを込めた。海の向こうの子供達に想いを馳せることにより、制作者自身の心も変革できたのではないだろうか。

それぞれがグループになり制作したものを分類すると、下記ようになった。

<グループ数/作品数>

- ① 既成の絵本の制作・英訳 <2/5>

- ② 紙芝居の制作・英訳(既成の絵本から) <1/1>
 ③ オリジナル創作絵本 <2/4>
 ④ 布の絵本 <1/2>
 ⑤ 木製はめ込み式パズル <3/4>
 ⑥ 絵合わせブロック <1/1>
 ⑦ 木製カルタ <2/2>
 ⑧ ボードゲーム（マップ双六） <1/1>
 ⑨ 竹製遊具 <1/2種類>



(2) 英語科の視点から

英語は、「言語」というコミュニケーションのための手段のひとつである。絵本の英訳や、英語の絵本作り（お話し作り）、英単語のカード作りなどの活動を通して、生徒は、学習対象としての

英語ではなく、「生きている」英語、つまり、「生活のなかで使われている」英語、「生きていく力を生み出す」英語といった、英語そのものが本来もっている、言語としての英語の姿を見ることができたように思う。

① 「生活と共にある英語」の発見

社会人講師の話から、現地では「もの」と「言葉」が一致しない子供が多いということを知り、英単語カード作りに取り組んだ生徒達があった。その際、まずどの英単語のカードを作るべきかが問題となった。子供達にはどんな語彙が必要かを考え、調査し、それが食物であれば、現地ではどんな食物が一般的かを調べたりする中で、生徒は、言葉は生活と密着しているということを実感していた。

② 「生きていく力を生み出す言葉としての英語」の発見

絵本の英訳や、英語の絵本作りに取り組んだ生徒達は、子供達に「どんな力を身につけてほしいか」「どんな夢を抱いてほしいか」「どんな感動を味わってほしいか」を考えて題材を選んだり、お話しを作ったりしていた。そのなかで生徒が感じ取ったものは、単に情報を伝える道具としての英語の力ではなく、全ての言葉がもっている、「子供達が未来を生きていくための力」を生み出す力だったと言えよう。

③ 自分の学習の統合と活用

絵本の英訳やお話し作りのなかで、生徒は目的をもって、自分のそれまでの学習を活用して英文作りに取り組んだ。その中で、それまでの教科の学習の深化・補充も行った。また、英単語や英文を絵画化するなかで、その単語や文が修正されていたりもした。なかでも、単語カードを作った生徒が、ブドウやバナナは、1つぶ、1本は単数だが、1房では複数になるということに、制作中気づき、英語の単数・複数というのは本当にあるんですねと感動していたのが印象的だった。



5. 学習の成果と今後の課題

(1) 国際理解学習としての成果と課題

① 自己の見方の変化に気づく

現地視察をしてきた社会人講師のスライド等を交えた話を聞くことを通して、今まで自分が当たり前だと思っていた生活を見直した生徒が多かった。

「今まで、日本がふつう、と考えていた自分を恥ずかしく思います。」「今まで自分のことばかり考えていた自分にはいい経験になりました。」等の感想が見られた。また、調査・制作活動を通して、自己の見方が変化するのを実感した生徒も見られた。「自分をはっきり言って軽い気持ちで入ったが、一時間一時間調査をしているうちにどんだのめりこんでいった。(中略) 作っているうちは、こんなので大丈夫だろうかと思っていたが、どんどん改良を重ね、確実なものにしていった。最終的には品物のみでなく、作った人達の心もフィリピンに届いてくれれば一番うれしいと思う。」

また、活動全体を通して、自分のボランティアに対する見方が変わったという生徒もいた。「今回、フィリピンの子供達の生活を調査して見て、本当の幸せは何なのかと考えた。(中略) もし、私たちがこんな生活を送って、幸せだと思えるだろうか。そうは思わないだろう。しかし、井上先生(社会人講師)は最後にこう言われた。『フィリピンの子供たちにとって、今の生活は決して裕福だとは言えないが、子供たちは天国のように思っている。だから、その思いを壊さないでほしい。そして、自分たちが子供たちに与えてあげるのではなく、手助けしようという気持ちで取り組んでほしい。』私たちが今まで行って来たボランティア活動は同情や、してあげるなどの気持ちがあったと思うが、どうだろうか。私たちは今まで、豊かな生活を送っている人は幸せで、貧しい生活を送っている人は不幸せだと決めつけてはいなかっただろうか。そんな気持ちでやっているボランティアとは、本物と言えるだろうか。私はとても疑問に思う。(後略)」

② 自分とは異なる文化をもつ人々の見方の違いや共通性に気づく

作品を企画するうえで、当初は簡単に考えていた生徒も見られたが、想を練る中で、本当に現地の子供達にとって役立つものをつくるためには、その国の風物や文化を知らなくてはならないということに気づき、使う人の立場に立って考えたりつくったりすることの重要性に目を向けることができた。具体的には、図書館等へ行ったり、社会人講師が現地で入手した教材を借りたりして調べたが、資料不足の感否めなかった。

「私達の生活とは随分違っているが、その人々

には、それが当たり前であり、生きがいと誇りをもっているのだろう。」という感想を書いて来た生徒もあり、自分とは異なる文化を認め、尊重する姿勢まで高まった生徒も見られたが、その一方では悲惨な状況にショックを受け、「かわいそう」「自分は幸せだと思った」などの感想にとどまった生徒もいた。

③ 互いに協力しながらより良く生きていこうとする姿勢と行動力をもつ

生徒は問題意識をもち、実際に行動に移せたことに誇りと満足をもつことができた。生徒の感想には次のようなものがあった。

「一番言いたいことは、この大きな(小さな)世界はやはり手をつないでお互い助け合うことが大切だと思った。これは、はたから見ればかっこつけの台詞のようだが、自分はフィリピンに心を送ったということで一つの自慢ができるわけである。(中略)ほかの皆さんもはたから見ただけではなく一つ自慢できるように助け合っていけばよいのではないのでしょうか。これは僕の一つの提案です。」「よいことだと思ってやっていることから差別が起こっているこの事実を私達がどう受け止めるかによって、いい結果を生むか悪い結果を生むかに別れてくるだろう。だから、差別・偏見をなくそうというだけでなく、行動しなくてはこの事実を受け止めたことにはならないということを学んだ気がした。」

(2) 表現活動としての成果と課題

学習の実際でも述べたように、フィリピンの子供達の「生きる力」を育てるため、生徒はそれぞれの考えに基づいて選択し、目的と願いをもって制作した。心の中に芽生えた憤りや使命感などを自分なりに表現・発信できたことに生徒達は満足感を得ていた。このことは最も大切にしたいことであるが、表現の質を問えばまだまだ表面的であった。

一つに独創性である。既成の商品のコピーも多かった。この場合、気持ちを込めて美しく仕上げるのが主になり、深く考察したり創意工夫することは少なくなる。本来のねらいからすれば、どのような力をどういう形で育てるか自身の力で研究し、フィリピンの子供達に合ったものを制作すべきである。レイアウトや配色、差し込む英文についても同様である。中学生には酷な注文であるかもしれないが、今後この活動が続くうえでマンネリを防ぐ意味でも、教科の学習を深める意味でも、前述のように発展していかななくてはならないと考える。

二つ目は仕上がりである。子供達のためのこのような製品は「見て楽しく、さわって気持ち良く、読

みやすい」というのが本来の条件である。時間や材料のこともあるが、受け取る子供達のことを考えれば完成度の低い作品もあった。

(3) 発表会についての成果と課題

講座内発表会については、互いに作品を発表し健闘をたたえあう時間にはなったが、意見をたたかわせたり考えを深め合う話し合いの時間としては十分でなかった。表現活動や制作活動が中心となる本講座のような場合は、制作の比較的早い段階(企画時など)に講座内検討会のような形をとって行った方が効果的なのではないだろうか。

全体発表会については、作品を系統毎に整理し、スライドやビデオを使って活動を紹介できた。何よりも自分たちの活動がきちんとまとめられたことは良かった。当初計画にはなかった展示についても、作品を整理して紹介できたことは、講座内生徒にとってもその他の生徒にとっても意義があったと思う。

(4) 教科との関連と次年度に向けて

この講座では、英語科と美術科の合科的な学習活動を取り入れた。もし英語科だけの講座であれば絵本の翻訳だけに終わっていたかもしれないし、美術科だけであれば、このような海外への発信はできなかったと考える。今回、互いの教科での学習を総合的に生かし、地域の活動団体ともコンタクトをとって、実際の問題解決に向けて行動を起こすことができた。生徒達にとっては大きな誇りであり、総合学習でなければできなかった実践である。英語科にとってみれば、普段の学習の応用であるとともに、生きた英語を再発見し、実感する場でもあった。また、美術科にとっては実務的な目的を持った造形活動という、新たな領域への試行であった。

しかし今回は時間的にも経験的にも不十分であったため、工夫改善の余地が大きくある。次年度も、今年度の活動を土台として、学習を継続的に発展させていく必要がある。また、そのためにも、送った作品が、実際にはどの団体を通じ、どのように子供達に渡され、どのように扱われているかを知ることが必要であろう。また、今年度その必要性を知らずに取り組めなかった、フィリピンの童話や民話を題材にした作品の制作にも、今後取り組んでいきたい。

今年度は時間の制約上、制作活動に費やした時間の割合が多かった。しかし、総合学習の利点を十分に生かすためにも、今後時間数が増えれば、企画、立案にもっと時間をかけ、想を練る時間を多くしたい。また、作品を作った後、どのようにしてフィリピンに送るかということまで、送料の手配も含めて、全て生徒達の手にかけて行えたらと願っている。

(もちだ たかし・美術科、なかがま ともこ・英語科)